

IV 劉さんが訴えたこと



獅子ヶ森山頂から花岡方面を望む

「六月三十日夜、暴動起こして、実は一カ月位前から、計画たてました」——と劉さんはいきなり切り出した。昭和五十年七月五日、東京都勤労福祉社会館で開かれた「花岡事件三十周年記念講演会」での講演である。三週間前に、札幌のパチンコ屋でお会した時とは違い、約百五十人の聴衆を前に、少し聞き取りにくい日本語で、淡々と訴える話には、聞くものをひきずりこまずにおかない迫力があつた。

「あの一冬は、まず、夏の服のまままで、やっぱり花岡は、とても寒いところなので、寒くて、耐えられないのです。それで、ようするにセメントの紙袋あるですね。あれをみな一枚ずつ盗んで、腹まきにして、ところがこの袋、返さなければならぬ。あれで、みなだいが殴られちゃったです。いくら殴られても寒いから、どうしてもお腹なかのとこ、風当って、耐えられないです。その後、なんぼ叩かれてもダメだから、上の方は命令で、一人一枚ずつ、与えてもよいとなつたのです」。文法的につながらないところや、逆の意味になるところが、かえって劉さんの話を重々しくしていた。日本語で表現する時の、ためらいや哀しみがそのまま伝わってくるようだった。雑誌「潮」の特集号で、評論家竹内好さんが「劉さんを見てると久しぶりに大人に会った感じがします」という意味のことを言っていたのを思い出した。その竹内さんは、講演会の皮切りに挨拶した人でもあつた。劉さんの話が續いている——。

「それで、冬は足袋がないからネ、ワラ足袋はいて、氷の中の仕事で、水はネ、川流れれば、深くないですネ。大体マア、一尺位な深さです。そこ上がれば凍るのです。昼、食事の時間は、ど

うしても坐られないです。雪だから。それで、火をこしらって、足あたって、ところが、みな足真白なつてから、熱いのわからないです。わかれば、もう火傷なっちゃう。そして一冬はほとんどみな病人なつて、足凍傷で、火傷で、働き出られないです。鹿島組の事務所の連中はネ、みんな仮病だと。働かなければ、働かない人には半分、一番最初食糧をきられて、ところが、半分かきられて、もう助からぬです。するとそれで、一週間休んでいると、大体死ぬです。これ食糧で死んでしまう。あの当時はまだ、メリケン粉と、トウモロコシませて、本当の食糧です。そこまでは、人はいくら足らないでも、死ぬまではならないです。ところが昭和二十年四月から、リングのカストネ、要するにリングの汁とったあとのカスト、大豆油とったカスト、この両方のカスト合せて、メリケン粉は、五分の一か十分の一かわからないけど、当時ぼく炊事の關係でないから知らないけどネ。ところが、あのリングのカストはネ、くさくて、しょっぱいです。なにかタル、フタあければネ、なにか踊ってるしネ、グチャグチャと真白いのか。いまなれば、そば行つてもネ。あの当時、それでも食糧は食糧だから。ところで、ああいうの食べて、ほとんどみな赤痢なつちやつて、ほとんど全員が赤痢です。食べたあとで、お腹が蒸発するですネ。それで食べなければ生きてられないし」。

タルのフタをあけた時のことを思い出さるのさう、劉さんは顔をゆがめた。「今なら犬でもくわない」というほどの食事。それに加えての、補導員たちの殴る蹴るの暴行。昭和十二年の蘆溝橋事件以来、中国に在留した日本軍は婦女暴行や、人を殺すのは平気だった、と劉さんはみる。

「とにかく人殺されたら、アリ一匹と同じだから、何も痛ましくないと。当時は、日本軍隊の服は、みれば虎の皮みたい、やっぱりおそろしいネ。ホントに威厳のある服なんです」。

威厳というのではないだろう。写真などでみる日本軍の服装がとくに恐ろしいとは思えない。その軍服の中味の行動や暴行こそ、まさに「虎」だったに違いない。それにしても、こんな食糧事情と暴行の繰り返しの中で、劉さんは冷静な目で、戦争が日本に不利に進んでいることを見破っていた。これは驚くべきことだ。

「あの当時は、死んだの人にも、焼くにしても、身体みんな裸しなければならぬです。この夏の服、ほんとボロですよ。それがなに、包帯のガーゼがほしいなんです。これはのうて（縫うて）きれいに洗って、包帯のガーゼ、やらなければならぬ。それで、ぼくだけの考えで、日本やっぱりこの戦争苦しいなあと。こんなボロの服、汚ない服、またほしいという」。

劉さんは、食事さえ十分与えられたら、どんなに働いてもよいと思っていたという。しかし、「チャンコロの野郎は、殴る蹴るでなければ働かない」という信念を持っているかのようには、補導員たちはふるまわなかった。これはつまりそのまま、日本の軍隊が、いや、当時の日本政府が持っていた、いやもって日本人一般が持っていた差別思想だろう。戦争そのものが、ある意味で差別的爆発であってみれば、劉さんの望んだ「たっぷり食べさせて働かせる」ことは絶対に望まれないことだったに違いない。

「補導員たち、全部軍隊いた経験あるし、大体、いわゆるチャンコロの野郎たち、こうしなければ

ば働かないの信念もってたです。相手はヤクザとか何かわからないけど、とにかく人を殴ると、自分が面白くて仕様がなです。それで、一番最後の決心はネ、リユウサクヨクです。あれは生きて帰ったです、証人残してネ。あの人は、頭ちょっとネ、普通の人より九十パーセント位足りないです。それで近所の農村の何か一人、おばあさんの弁当食べたらしいですネ、おにぎり飯か何か。あそこは、メシ、メシ頂だいと、食べるものは何でもメシ、メシだから。ところが、水かけて、ぶん殴っただけでなくて、足こう縛っちゃって、手をうしろ縛って（ト劉さんは身をよじて実演した）、あの当時、土の道路の工事だから、何か小さな車ある、レール上らせて。あのレールを火焼いて、とにかく真赤く熱く焼いて、縛ったままの足のなかにはさんで、それでもう煙出ますよ。あの声はネ、本当、棒で殺されるの瞬間の声、出すですよ。それも、聞こえるも聞こえないも、聞こえてもネ、涙出る位の声だったです。それだけで終れば、まだいいけども、補導員が冗談半分に、キセル煙草吸いながら、キセル焼けるからネ、首とか顔、どこでも焼くです。どうせこの人、あとで殺すつもりだから」。

「フウィッ」と場内から嘆息がもれた。押し殺した空気が、いやおうなしに緊張していく。劉さんは、それを感じながらも、どうしても話さずにはおれないという感じで続けた。実に、まだ続くのである。

「それで、今度は寮の中に運んで、運んだあと、これは終ればいいです。運んだあとにはネ、ちょうど昭和二十年四月頃、新しく役きたです。あれは桧森という人ですか、足一本ですネ。あの人

が、また特別に、特務の教育受けたかわからないけど、あれだけ焼けたあと、焼けたあとでネ、それからまた土に向いて、ツルハシの棒でネ、改めて叩かなければならない。それで焼けたあとでも、腫れちゃったから、もう身ふくらんで、みな割れちゃったです。ちょうど五、六人で交替、交替やったあとで、これまたすまない。我々の幹部の指導、いわゆる大隊長、中隊長、小隊長、これまた五、六人集まって交替、交替で命令で叩くです。大体我々、同国人これだけに気の毒で、この手でやられるかやられないかと、皆さん、大体御想像にわかっていると思う。初めからやらないから、例えば、叩いたときは、片方土にあたるようにネ、なるべく足あたらないように。ところがあの連中見てるだから。それでやむをえないから、結局、インチキで叩いてはできないから、当然この人は、死んでしまわなければならない。あれが、暴動の原因は、一番大きな原因なんです」。

濃厚な劉さんの顔が苦痛でゆがんでいた。一気に話して、天井を見上げて静かに目をとじた。言葉が乱れていたのは、そのまま心の動揺、怒りや哀しみをあらわしていたのだろう。今これを書きながら、突然こんな話を思い出した。——あるユダヤ人収容所長が、ユダヤ人を水の代わりにガスが吹き出すシャワー・ルームに送り込みながら、自室でピアノを弾いていたというのだ。ブラームス、リスト、ベートーベンを素晴らしく美しく。当時、収容されていた音楽学校の学生だったユダヤ人がこれを聞いていたが、彼は救出されても音楽の世界へ帰らなかった。「悪魔のような心の持主でも、あんな美しい演奏ができる音楽というものが自分にはわからなくなったか

らだ」と。河野典生氏の「わが大地のうた」(徳間書店)に出てくる話だ。

「生きていると思うな、勝ったという気せい」と暴動が起きた。失敗して全員が捕まる。共楽館前の広場で、在郷軍人が銃剣の刃をサアーと出して、十六、七歳の子どもがワアッと泣き出した。劉さんは、みんな捕まってから機関銃でやるか、海へ落とすか、とにかく殺される、と覚悟していた。

「あれは親指なんです(ト突然、共楽館での拷問の話に入った)。ここから針金で縛れば、他の指になればもう折れてしまう。親指は全体でもつです。うまく考えただすよ。皮は全部むけたけどもネ。折れることはないです。私はそれで、捕まった当時は、ちょうど通訳おったんです。あれ特高警察です。それで、中国語、全て通用するから、『お前、しゃべっても死ぬ、しゃべらなくても死ぬ』とネ。当時、こんなポーズで、うしろ針金ついているとネ、私は相手のテーブルの前でこうやっていると、うしろから一、二回こうやれば倒れてネ、また縛られて、何べんもやられて(ト劉さんは両手をうしろに組んで、前のめりに転ぶしぐさをした)。それで、(共楽館広場での)三日間のあとで、今度、秋田刑務所、秋田で裁判受ける人、十二人行ったです。あと私はじめ、全員は鉱山の中の寮戻って、ぼくの仕事、広場の死んだの人と、別なところで死んだの人と、大体、名前、確認できなくなりました。今までの診断書、みんな私書いたです。大体、腸カタルか、あれは栄養不良しかない。殺されても、誰でも、全部、それで病名はつけたです。今度、名前、確認できないから、大体人間の顔って、一週間たてば、何かウジで、頭は大体、三倍も四倍

も大きくなってるしネ。目もないし、鼻もないだし、結局全部わからないです。もう焼くことできないで、みなスコップでやって、一つ穴八十何人か、一つ穴四十何人です。あとでまた五十何人」。

しかし、言ってみれば、ここまでの劉さんの話は、枕だった。本論はこのあとにあった。

「私自身は、もう忘れちゃったです。それでこの事件で、あるいは他のことで、日本の作家の先方と、労働組合の平和運動するの方と、一昨年、日中国交正常化にもなったし、周恩来総理、田中前首相と、共同声明も発表したし、過去のことで忘れたと。これから、我々また、改めて、いわゆる同種同文という、顔色同じだから、民族違うけれども、これからまた仲良く、まだ遅くないだし、あの戦争の不幸のことで、再び繰り返さないように、私の方から、改めて、日本全国の、国民の皆さまに、お願いするつもりです。それで、非常に過去のことで、ぼく自身忘れて、いまた再び繰り返して、本当にあまりいいことでもないように、かえって皆さんの気持聞いて、本当か嘘か、複雑な気持を、こうして不完全ながら、終わらしていただきます」。

言葉を失うというのだろうか。正々堂々とした劉さんの態度に圧倒された。「汝自ら考えよ」と突き放されて、僕らは、ずしりと重い想いを胸に会場から出た。

暑い日だったかどうか記憶にない。街を歩く人たちの顔がいやに無邪気で明るそうに見えた。地下鉄に乗って、僕は車窓に写った自分の顔を見ながら、劉さんの話を考えていた。講演のあと、三十代と思われる男の人が質問した。「中国の人は、戦争当時君は子どもだった。君には責任は

ないと言います。果してそれでいいのでしょうか」。講演会に参加した竹内好さんも、野添憲治さんも、そして劉さんも、当惑したようだった。「日本人は恥の文化を持っていても、罪の文化は持っていない」。質問した人は、一人言のように呟いて坐った。

地下鉄の窓の向うに、憂鬱そうな顔がいくつも並んでいた。隣りにいた友人が「知らないってことは恐ろしいことだね」と言って、黙った。車内に吊り下げられた週刊誌の広告には、ニコッリ笑った美人が、スキャンダルを散りばめた活字に寄り添っていた。「罪の文化」とは何だろうか。

劉さんが経営する同楽会館のパチンコ台は何とユニークなことであつたらう。チューリップはないかわりに、玉の入る穴が実に三十二個もあるのだ。客は多くはなかったが、いかにも常連といた人々三十人近く、思い思いの台で遊んでいた。今流行の台に変えないことに劉さんの「持続する志」を見ようとするのは、やっぱり暴論だろう。しかし、花岡事件のことを、苦痛をもって語らざるをえない劉さんが、講師として東京まで出かけてきた（しかも旅費は頑として受け取ろうとしなかった）を考えると、並々ならぬ覚悟のようなものを感じるのだ。講演の最後に、劉さんが「日本全国の国民の皆さま」と呼びかけているのは必然の結果だろう。

あれから一年が過ぎたのだ。いろいろなことがあった。今年の夏、中国人を母親に持つ青年が小さなパンフレットを届けてくれた。「花岡・一九四五年六月三〇日」——秋田に暮していたとき、花岡事件を知り、現地を歩いて事件の全体像を探っていた。現在、学生運動に関係している

彼にとって、花岡事件には武装蜂起して闘った人民の輝かしい勝利がある、という。そして、彼は、花岡事件の犠牲者の数を四百七人としている。「仲間に殺された任鳳岐は他の犠牲者とは違う」と、四百十八人の犠牲者から除いているのだ。この敢然とした区別に、彼が関わる学生運動の一種の純粹さと、それ故に激しい内ゲバを繰り返す悲劇を見るような気がする。

そして、北海道新聞の記者と伝え聞く舟田次郎氏の「異境の虹——花岡事件・もう一つの戦後」(「たいまつ社」という本も出た。劉さんと同じく、花岡事件の証人として日本に残り、札幌に住んだ林樹森さんとの交際を通じて、戦後日本の在り様を鋭く告発している。何度かの自殺未遂のあげく、昭和四十八年九月、肺炎で死んだ林さんを、舟田氏は「日本の軍国主義もよく殺せなかった林樹森さんの強靱な生命を断つたのは、戦後長期間かかって定着し切った『民主主義社会』の空疎な中身だ——私には確実にそう思えてきた」と分析する。そして、その「あとがき」の結びは圧倒的だ。「原爆、敗戦、そして日中復交という歴史の転回点を経てもなお、基本のところではなんの価値転換も果たされなかったということ——その意味を考える作業がいま、私たちの側に残っている」。舟田氏が「変らざる日本」と言うが、しかし、変っていないと知ったとき、確かに新しい作業へと一歩踏み出している筈ではないか。

今年も六月三十日に、信正寺で「日中不再戦友好碑を守る会」の慰霊祭が行なわれ、十四、五人の参加者は不再戦の碑の前に深々と頭を垂れた。八月二十日には、日中友好協会正統本部の慰霊祭も開かれ、中国大使館員も出席して盛大な追悼を行なった。何かが少しずつ変っているよう

な気がしてくる。五月に公表された外務省の秘密文書の中には、同和鉱業花岡鉱業所が昭和二十二年八月、連合国総司令部に提出した報告書「中華人収容所に関する件」も含まれていた、と聞く。歴史の歯車がゆっくりと確実に回転しているという気がする。

戦争を知らない世代が日本人の半数を超え、八月十六日付の新聞は「終戦記念日の正午の黙禱にも、銀座の雑踏の流れは変わろうとしなかった」と報じている。「人間は後ずさりしながら未来に歩いていく」と言ったのは誰だったか。「戦前派」が戦争責任を不問にし、「戦中派」が戦時下の体験を忘れたるのであれば、残された「戦後派」と称される若い日本人はどうすればいいのか。黙禱をしないのは、それをすべき理由が見つからないからだ。そして、一年間にたった一分間の国民的行事で事足りりとするとはできないと知っているからだ。——他愛もない夢想かもしれないが、劉さんの話や、花岡事件をめぐる人々の想いを胸に、そんなふうに気負ってみたい。花岡事件に最初にめぐり会ったときに衝撃を受けた、押切順三さんの詩を再び読みなおすことから始めたい。

無人の村

山狩りの一隊は必死のおもいだった。

敵の退路を遮断せよ、その号令におびえながら

竹やりと日本刀をかついで山に向った。

捕えたのは一人の「敵」であった。
やせこけた男は目をつぶってじっとしていた。

山狩りは終わった。

その一人の捕虜は
手足をしばられ一本棒につるされてはこばれた。
富士の巻狩りの絵にある
あのいのししみたいにだ。

部落の兵卒たちは棒をかついで山をおりた。
うす目をあけておれを見ている、と
部落の兵卒はしきりに棒かつきを交代した。

親方衆は威勢よく刀をならしては
狸汁だ、狸汁だ、とわめいた。
部落から県道に出て

彼はトラックに積みれリンチ場にはこばれた。

一九四五年、夏のことである。

彼を、李といったか王といったか
誰もその名を知らない。

また、殺された三〇〇人余の中に彼がはいっていたか
それとも新しい中国に帰ったか
それも誰も知らない
誰も語らない。

あれからもう十二年になる。
口をぬぐっているみたい
そして

物語りに飢えているみたい
七月の村は森閑としている。

あとがき

「花岡事件・三十年の壁」は、昭和五十年七月四日から八月三十一日まで、三十回にわたって朝日新聞秋田版に連載した。本にするにあたり一部補筆、掲載の順序を変えたが、内容はほとんどそのままである。登場人物の年齢も記事が出たときの時点でのものである。

あきた文庫の一冊にと言われた時、大いにためらった。直接ルポした部分も多いが、一部これまでに出ている本や資料を孫引きしたところもあり、朝日新聞秋田支局なり、筆者の名をつけるのはおこがましいと思ったからだ。が、地元の同年代の人たちで、この記事で初めて花岡事件を知ったという人が意外に多いことを知り、また、全国高校野球選手権と重なったため、連載が飛び飛びになり、幾人かの読者の方たちから「続きはいつ出るのか」とお叱りを受けたこともあって本にすることにした。「取材ノート」「対談」は、連載分だけでは分量が足りないという秋田書房の希望で加えたが、内容のない筆者の楽屋を被露する破目になった。仕方ないと思う。

取材の動機や、取材上の失敗などは、本書の中で書いたから繰り返さない。当時の上田満男支局長が、北海道での体験に裏付けられた適切なアドバイスをしてくれたこと、宮崎千勝デスクが、情に流れがちな原稿を厳重にチェックして、文章をがっちりしてくれた。さらに、所帯の小さい支局で、支局同人が、折りにふれて感想や問題点を指摘、連載を助けてくれた。鹿島建設の重役

著者略歴

清水 弟（しみず てい）
昭和22年、新潟県長岡市に生まれる。東京外語大フランス語科卒業、昭和46年に朝日新聞入社。水戸支局を経て、現在秋田支局員。
現住所・秋田市山王2～1～46
朝日新聞秋田支局気付

花岡事件ノート

1976年3月20日発行

1976年10月25日改訂第2刷

著 者 清 水 弟
発 行 者 簾 内 敬 司

発 行 所 秋 田 書 房

秋田県山本郡二ツ井町比井野25
電 話 0185733156
郵便振替 秋 田 9516

乱丁・落丁本はお取替いたします 印刷・製本/能代市・こんどう印刷

をしているという河野氏に会うチャンスがなかったことや、暴動後、中山寮に派遣されたスパイという人に会えなかったことなど、心残りが多いが、いずれかの機会に補いたい。

花岡事件が当時の新聞に一行も書かれていなかったことをもっと考えたかった。当時の朝日新聞を含む各社の記者に会い、何故書かなかったのかを確かめたかった。さらに、仮に当時自分が秋田市か大館市にいたら、花岡事件を書いたろうか。現地に飛んで行って取材をし、記事にしようか。他人事でないという気がしてくる。僕にとっては、この取材はそうした自分の仕事を問う正すことにもなった。問題は今はじまっただばかりなのだ。

取材に応じてくれた劉さん、李さん、伊勢さんをはじめ多くの方々、とりわけ、連載中も時々取材上の助言を頂いた野添さんには、対談にまで時間をさいて頂き、最後までお世話になった。あらためて心からのお礼と感謝を捧げたい。（一九七五・十二・三十）

「劉さんが訴えたこと」は、翌五十一年六月二十七日から七月一日まで、五回にわたって朝日新聞秋田版に連載した。講演会を企画した東京やまなみの会が出している雑誌「東京やまなみ」に全文の速記録が紹介されているが、連載は自分のノートを使って構成した。快く転載を許して下さった「東京やまなみ」の重永博道氏にお礼を申し上げる。再版を機会に、改訂版を出す労苦を引き受けてくれた秋田書房にも感謝したい。（一九七六・九・十五）

あきた文庫発刊にあたって

かつて学術学芸のいっさいは狭き堂宇に閉鎖され、それは僕らの父祖たちのあずかり知らぬものであった。しかし、その有様が如何ようなものであれ、真の創造と学問が、歴史への対処の正しさとして常に民衆の側にあらねばならぬことは古今を通じて明らかである。僕らの父祖たちが、忍従の生存の道に生き、苦難のなかで涙をながし、ついに発言せず土に還った時代は遠い。しかし、彼らの暗い道に光りを照らし、一滴の涙に大きな沈黙の声を聴き、その無言の泉からは意味を汲むという蔽爾な作業が充分に為されてきたとは思われない。

「あきた文庫」は過去と未来をつなぐ現代を起点とし、過去からは埋もれた事実を発掘し、その集積と現代の状況との照合を基礎に、未来への想像力を発揮する人々の一助となりたい。そして、願わくば、「あきた文庫」が、それぞれの地域に依拠する若き人々にとって、自己の生活批判と向上のために役立てられ、ついに自ら自立と創意と連帯に満ちた行動とペンを起して、この遠大な企画に参加することを切に希望するものである。

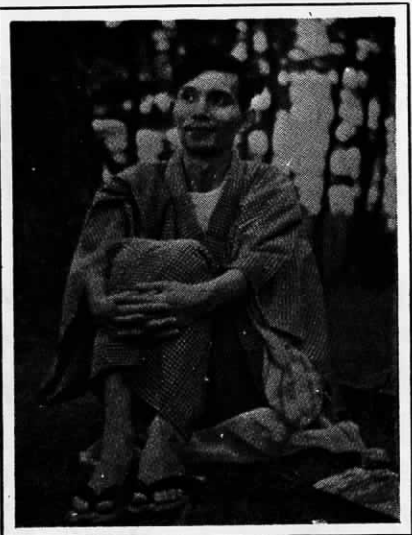
最後に、この企画の出發と持続が実に多くの「あきた文庫刊行会」の人々によって常に支援されていることをここに併せて記し、その友情に深く敬意と感謝の念を捧げるものである。

一九七五年十一月

あきた文庫発行人
藤内敬司

秋田書房の本

あんべひでお詩集



昭和三十八年十月、秋田県本荘市の国立秋田療養所でひとりの詩人が四十一歳の苦闘の生涯を閉じた。戦争と闘病によって悲惨に傷つきながらもすぐれた詩精神を失わなかった彼、あんべひでおの作品は、今、我々の未来に圧倒的な光彩を放っている。この詩集は、戦後を生きる全ての人々に捧げられるべきであらう。

詩六〇篇の他に、略年譜、解説、文献索引等を収録して、ついに明らかにした幻の詩人の全貌！

B6判・上製・二二〇頁
一三〇〇円(税別)

あきた文庫

あきた文庫 1
野添憲治
上田洋一 著

小作農民の証言

— 秋田の小作争議小史 —

定価 580 円
(〒120 円)

あきた文庫 2
清水 弟 著

花岡事件ノート

定価 580 円
(〒120 円)

あきた文庫 3
小番 績 著

院内銀山考

— 北方侵略と金属資源をめぐる考察 —

定価 630 円
(〒120 円)

あきた文庫 4
小坂太郎 著

北方農民詩の系譜

— 農民の生活と思想 —

定価 630 円
(〒120 円)

続刊
野添憲治
田村憲一 編

樺太の出稼ぎ

〈 林業編 〉